

木下尚(なお)江(え)考

著者	村井 康男
雑誌名	社会労働研究
巻	1
ページ	123-140
発行年	1954-01-01
URL	http://hdl.handle.net/10114/00017338

木下尙江考

村井康男

初期社會主義運動史において安部磯雄・木下尙江・石川三四郎等の諸氏はキリスト教社會主義者と呼ばれているが、この場合いりまでもなく、これらの人々が歐米におけるようなキリスト教社會主義——それは、當時社會主義の紹介に大きな役割をはたしたというイーリー原著『日本現時之社會問題附近世社會主義論』（明治三十年刊）等によつてすでに紹介されている——を奉じていたというわけではない。彼等がこの稱呼で一括されるようになったのは、おそらく『平民社』の解散後、『新紀元』と『光』とが對立刊行された時期においてであつて、彼等が自稱したものではなく、唯物派の人々によつてか、あるいは第三者によつてか、烙印づけられたもののようである。そして社會主義達成の手段についてキリスト教的人道主義の見解を越えられなかつたという共通點こそあれ、彼等のあいだには——例えば、はやく同志社在學時代からクリスチャンとして貧民救済に心を砕き、歐米に留學して社會主義者になつたという安部磯雄と、自由民權運動の強い影響のもとに青年となり、天皇神權主義の狂いたかまる中にその抵抗者として身をおこしてきた木下尙江とでは——その思想感情において非常に異つたものがある。以下は、これらの人々の中の一人、木下尙江についての不十分な覺書である。

安部磯雄は次のように記している。「世人往々新紀元社の主張を指して基督教社會主義と稱するものがある。吾人は敢て此名稱を避けんとするものではないけれども、これが爲め幾分誤解の生ずることなしとも保し難い。吾人は基督教の精神に依りて社會主義を宣傳せんとするものなれども、是が爲め社會主義の主張を變化する如きことはない。吾人は彼の英國などに於ける基督教社會主義の如く、單に社會改良主義を主張して満足するものではない。吾人は茲に明言す、吾人の社會主義は社會民主主義にして最も根本的に社會を改造せんことを主唱するものである」(『新紀元』第五號。『社會主義と基督教』)

一

木下尙江は一八六九(明治二年、信州松本藩の最下級武士(卒族)の家に生まれた。父の秀勝は維新後はやく警吏となつて他郷に奉職し、郷里に残された家族(祖母・母・尙江・妹)は父の仕送りと耕作によつて生計をたてた。その生活はけつして樂ではなかつたろうが、その中から二子を東京へまで遊學させているところを見れば、維新後に生活が悪くなつた部類には屬さなかつたであろう。譜代小藩の没落士族層の、しかもこのような家の子であるという出身は、彼の急進的思想の形成に一つの契機をなしていると思われる。彼はキリスト者となるまでの閱歷を回顧して、自分には三人の恩人がある。第一は木下秀吉であり、第二はクロムウエル、第三は使

徒パウロであると語っているが、この第一の恩人にあつたのは、このような不平士族層の中にそだつてともすれば舊幕時代をしたうような氣分に感染しがちだつたという少年時代のことである。彼が小學にあがつたころは、舊秩序が急速に轉落しつゝあつた時代であるが、まだまだ(あるいはそれゆえに)系圖とか身分とかがやかましく言われ、小學生の間でも系圖詮議は絶好の題目であつた。學業では何のひけめも感じないが、系圖というべきほどのものを持たぬ彼にとつて、これは苦勞の種であり、そのため學校へ行くのが嫌になるほどであつた。しかし或る日偶然にも自家の先祖が大阪浪人であり木下秀吉とゆかりのあることを知つて、水呑百姓の子から空手天下の主となつたこの猿面冠者に共感し、系圖とか身分とがいかにくだらないものであるかをさとつた。こゝに彼の守舊

的感情は雲散して、明治維新の信者となつた。たゞしこれは、明治維新が豊臣家の仇敵徳川將軍を亡しことに復讐心の満足を感じたからであつて、維新の意義を理解したのは、その後大久保利通の『遷都の議』などを讀み、福澤の『學問のすゝめ』によつて四民平等・人類同權の新思想を知つてからであつたという。

彼の小學上級から中學への時期に、自由民權の運動が全國にまき起つた。まだ集會條例が發布されないころには、この地方でも寺の本堂を會場としてしきりに政談演說會が開かれたが、すでにこのころ、彼はその熱心な聽衆の一人であり、若い民權家の悲憤慷慨を聞いて、「自由のためなら死んでもいい」と感激するような少年であつた。そして政府の彈壓政策下に地方の運動が激化し、各地に暴動が勃發するにいたつた時期、中學も上級に進んでいたこの少年は、生來病弱ではにかみ屋だつたその性情を一變するような衝撃をうけた。松本監獄に投じられた飯田事件（十七年）の被告等が朝な朝な裁判所へ引かれて行く―しかし、昂然たる―姿を眼底に焼きつけられたことと、英國王に叛逆人の判決を與えて斷頭臺へおくつたクロムウエルの事蹟を知つたことである。彼はこれとかれを思いくらべ、「國王をさばく法律」を學ぼうと志をたてた。

かくて中學を卒えた彼は、十九年上京して東京専門學校に入學する。彼は英國憲法の講義を聞くためにわざわざこの學校を選んだのであるが、それを實際に學んでみて知つたことは、「『王は惡を爲すこと能はず』の一句が實に英國憲法と云へる一大組織の要石である。一切の權力は國王の一諾を経ざる限り其効力を生じない、法律は國王を審判くものでない、世に國王を審判く法律てうものは存在しない」ということであつた。彼はパンを求めて石を投げつけられたように感じてしばらく修學の精神さえ失うのであるが、近づく國會選舉をひかえて、立憲政體の幻影につかれてゐる時代の雰圍氣の中に、やがて彼も「内閣は國會における多數によつて容易に取り替えられる」、「法律は人民の意志だ、人民の意志が國會に實現されるのだ」「帝王は只だ歴史的記念で現在に於ては無權無能の偶像だ」「帝王を審判く革命も最早其の必要が無くなつた」と考え、たゞ國會開設の曉に民間黨が多數をしめて藩閥政府を打ち壞す嬉しさをのみ夢みるようになったという。

以上は彼の自傳的著作『懺悔』（三十九年）の記述によるもので（引用句も同書による）多少の誇張をふくんでゐると思ふが、このキリスト教社會主義者の精神的前歴と、當時の一部進歩的青年の心理が知られて興味ふかい。彼が「國王を

審判く革命は最早必要が無くなつた」とした明治十九——二十年の交こそ、自由民権運動がその民主主義的實質を失つて挫折し、他方國會開設を前にして——皇室財産は數年前の三十倍に増加し、天皇官僚としての官吏服務規律が制定され、欽定憲法の草案が進行し等々——天皇制の強化確立が着々と既成事實化されていた時代だつたのである。

二

國會開設にかけられた期待がいかにもむごたらしく裏切られたかは、その後の歴史が明瞭に示すところであるが、それが木下をして「國王を審判く革命は最早必要でなくなつた」という考えをどのように訂正させたかは、記されていない。しかし『教育勅語』公布に象徴されるイデオロギー的反動が強化するにつれ、それに對する抵抗者として自己を記述していることは、前記の思想が青年のかりそめの激情にすぎなかつたのではないことを語るものである。

二十一年東京専門學校を卒業した彼は、すでに父の亡い家族の面倒を見るため故郷に帰り、信濃日報に筆をとるかたわら、地方的な政治團體の結成に奔走して、ひそかに將來の國會進出を夢みていた。しかし間もなく長野縣分縣問題という地方的利害の濃厚な事件にまきこまれて、この書生上りの理

想家はまつたく立場を失い、郷人から異端視されその新聞までつぶされるという手痛い打撃をうけた（二十三年）。

キリストの福音がはじめて彼の心を叩いたのは、このような失意と孤獨の時期においてであつた。彼はふとした事から聖書の山上垂訓の章を讀んで心を打たれ、キリスト教の文書を讀みあさつた。

「予は神學というものを理解する力を有たなかつたが、自然界を通じて其の奥に神の存在を確信した、予の心が「然り、神あり」との明答を與へた時、歡喜の狀は如何であつたらう、眞夜中の闇に迷ひ果てたる旅人が、意外にも額に近く朝日の上ぼるのを見たる驚きと嬉しさにも喩へようか。然しながら基督の福音の眞精神が容易に會得される筈は無い（中略）予は基督よりも使徒パウロを好いた、予は猛烈なるパウロの意氣に感激した。予は使徒行傳を愛讀した」（『懺悔』）

しかしキリスト教界の實情が知られるにつけ、彼は疑問と不滿のわきおこるのをおさえることができなかった。時はちやうど『欽定憲法』『教育勅語』の公布につゞいて、天皇神權論者穗積八束が東京帝國大學に憲法講座を擔任し、「神道は祭天の古俗なり」の論文を發表した久米邦武が同じ大學から追われ、勅語に禮拜を拒んだ内村鑑三が第一高等學校から追われるという、イデオロギーの面からの天皇制強化と戦争

準備が强行されている時期であつた。數年前まで歐化主義の波に乗つていたキリスト教も「日本の國體に反するもの」「愛國心を亡ぼすもの」として窮地に追いまれていた。しかしキリスト教の四海同胞主義に自己の據り所を發見した木下がキリスト教に求めていたものは、キリスト教が「國體とまづたく相容れない」ことを宣言し、戦争にたいして堂々と反對してくれることであつた。そして彼が現實に見たものは、いかにして國體と矛盾しないか愛國と抵觸しないかの辯明に汲々とするキリスト教界であり、著名なキリスト教徒が全國を遊説して、「正義の戦争」を鼓吹する姿であつた。彼は「この醜態に狂氣するほど憤慨した」と回顧しており、その十年後の日露戦争に際して「確信を以て非戦論を唱道することの出來たのは予の感謝に餘る所である」と記している（『懺悔』）

當時彼は教會にも出入し、松本の美以教會で洗禮を受けたこともあるようである。しかしやがて不満と失望からキリスト教を遠ざかつた。

彼はこれよりさき一年ほど他郷に漂遊ののち、二十六年から郷里で辯護士を開業しており、その間小説に筆をそめたらしく、二三の習作を残している。キリスト教から遠ざかつた時期には酒色に沈溺するような生活がつゞいたらしく、そのころの彼の生活は小説『良人の自由』の主人公においてし

ぶことができる。そしてこの小説の主人公はどのような生活から立ち上つてアメリカに渡航するのであるが、現實の木下は、三十年六月にいたつて中村太八郎とともに普通選挙期成の運動を起すのである。彼は記している。「帝王神權の専制思想が滔々として形式ばかりの立憲的日本を漂わして居る時、塵に汚れぬ信州の山奥から、純白なる民主主義の絶叫を挙げようと云うのが、實に満身の熱望であつた。予は自ら檄文を起草して配布し、演説會を開いて運動の旗揚げをした、先ず郷里に多少の地盤を据えた後に東京へ持ち出し、明治の維新が『尊王討幕』の符調で出來たる如く『普通選挙』の一語をば、第二維新の符調にせねばならぬと思つた」（『懺悔』）

まもなく彼等は意外な事件のため入獄の憂き目を見た。縣會選挙の不正を摘發しようとして、かえつておとし入れられ、恐喝取財の罪名で起訴されたのである。七月に入獄して十二月に初審有罪となり、翌年十二月東京の控訴審でようやく無罪の判決を受けた。この一年半の獄中生活が彼の「父なる神」への信仰を深め、一個のキリスト教徒として世に立つと決意させた。このキリスト者として立つて立とうとしていた出獄當時の心境についても彼は次のように記している。

「予は『帝王神權』主義が政治に教育に宗教に、日本國民の全心を掌握して居るの容赦することが出來なかつた、特に

基督教界の空氣までが之に感染し居るのを見て、悲憤の念に堪えなかつた、予は純白の民主主義を絶叫することが予の職分であると自信した、予は『普通選舉』の急務を眞に確信したのである」（『懺悔』）

さらに後年になつてではあるが次のようにも記している。

「其時、私の眼中には二個の敵國がありました。『軍隊』と『帝國大學』とです。穂積八束氏が帝國大學に君臨して『神權論』を高調して居るのです。私は『普通選舉』が一枚看板で口を開けばデモクラシーを叫んだものです」

三

出獄してまもなく翌三十二年早々、友人石川安次郎（半山）の推薦で東京毎日新聞に入社、島田三郎社長のもとにその後數年にわたる記者生活が始まる。

「此は日清戦争の後、支那の償金はいつて、事業熱の勃興と共に始めて日本に『勞働問題』という熟語が傳わり、職工の間に組合組織が競ひ起る一方、學者・思想家の間には『社會問題』が盛んに論議される新時代であつた。僕の入社した毎日新聞でも、社長の島田三郎先生が、去年の暮、舊い關係の政黨を脱退して自由獨立の身となり、言論文章で新機運を起こそうという意氣發刺の折柄で、『青年』『勞働者』

「婦人」、これが先生の三要因で、現に『青年革進會』の會長であり、たしか活版工組合の會長であつたように記憶する」（木下『神・人間・自由』）

この自由主義者島田社長のもとに、毎日新聞は東京市會汚職事件・廢娼問題・足尾鑛毒問題等々に批判・抗議の論陣を張つた。その中で特に木下に大きな影響を與えたものに足尾鑛毒問題がある。島田の命を受けて單身現地に出かけた彼は、その實情を知つて大きな怒りを抑えることができなかった。そして田中正造翁を助けてこの問題に奔走するにいたる。その時の實情報告は毎日新聞に連載され、後に増補して『足尾鑛毒問題』と題するパンフレットにまとめられている（三十二年）。この問題についてはさらに三十四年十一月島田三郎・田中正造とともに渡良瀬川沿岸視察に行き、帰京後基督教婦人矯風會に働きかけて鑛毒地婦人會救濟會を組織させた。そして東京はじめ全國に運動が展開され、社會に大きな關心をまきおこしたことは著名である。彼はこの問題を通じて「資本家階級が政權を操縦して國民を荒廢する悲劇は、常に泰西列國のこのみで無く、既に日本國民頭上の緊急事件であることを知つた。其れと同時に予は又立憲政治なるものが、此の害惡を救う上に於て、果して何程の効力あるかの疑惑をも思ひ浮べた」（『懺悔』）と語っている。

これよりさき彼は毎日入社後まもなく幸徳秋水と相知り親交を結んでいる。幸徳が萬朝報に入つた翌年のことで、すでに社會主義研究會のメンバーであつた彼が、『廿世紀の怪物、帝國主義』（三十四年）『社會主義神髓』（三十六年）の著者への道を急歩調で進んでいた時期である。幸徳から研究會への入會をすゝめられた木下は、研究など柄でないと斷つてゐるが、彼もまた、新聞記者として前記のごとくなまなましい社會惡と取り組みつつ、新興の社會主義思想によつて現實認識の目を開かれていつた。三十四年五月には幸徳のすゝめで『社會民主黨』の結成に参加、片山潜と並んでその幹事にあげられ、神田猿樂町の彼の借宅は黨の事務所であつた。結黨が即日禁止されたのち同志たちは社會主義協會の名の下に雌伏を余儀なくされたのであるが、その三十四・五年の『六合雜誌』には尙江の論説がいくつか載せられている（三十四年、二四五號『明治の病的政史』、三十五年、二五二號『社會悔悟の色』、二五五號『野生の信徒』、二五九號『歴史上の徳川慶喜』、二六二號『女學生問題の研究』）

三十六年日露の風雲が急になり軍國主義の宣傳がいやが上にたかまつた時、幸徳・堺利彦・内村鑑三等のよる萬朝報と木下による東京毎日とが、言論界における非戰論の二大據點となつたこと、萬朝報の方針が主戰論に變つたため退社し

た幸徳・堺が平民社をおこし週刊『平民新聞』を發行するや、木下も社外からではあるがほとんど同人と同様これに協力したことは、周知のとおりである。その後、社會主義講演會に非戰論演説會に地方遊説に、また東京衆議院選舉の立候補者として奔走し、そのうゑ『火の柱』（三十七年一―三月）『良人の自白』（上篇、三十七年八月―十月。中篇、三十八年四月―六月。下篇、三十八年七月―十月）の長篇小説を東京毎日新聞に執筆連載してゐる。これだけを見ても彼の活動がいかに白熱的であつたかが、想像される。世をあげて軍國主義におどらされた日露戰爭下に敢然と非戰論を主張したこの時期こそ、革命兒尙江の最良の時期でありまたその絶頂であつた。

四

この最良の時期に彼がその精魂をかたむけた傳道の主な内容は、まず第一に非戰論であり、戰爭を支持するキリスト教會の批判であり、普通選舉の主張であり、帝王神權思想にたいする反撃、自由戀愛論による封建的家族制度への抗議であつたが、彼がこのようなブルジョア民主主義的主張をキリスト者・社會主義者として主張している點が、今日から見てきわめて特徴的である。當時の木下におけるこのキリスト教と社會主義との關係は、週刊『平民新聞』の「予は如何にして

社會主義者となりし乎」のアンケートに答えた次の一文に明瞭に現われている。

「予は初め少しく法律を學びたり、而して全く之を信じた、既にして法律權威の淵源に向つて疑念湧出するものあり、偶然にも從來輕蔑せる耶蘇教を通じて「神」テフ思想を得るに至り、一段の安意を得たりしなり、斯くて予は四海同胞主義の熱心なる信者となりしも、生存競争の地上の悲劇は、神學の解釋すべき所に非ず、天地の矛盾は新に發見せられて心中の煩悶殆ど明狀すべからざりしものありき、之を慰籍したるものは則ち社會主義の經濟論なり、斯かりし後顧みて聖書を繙けば一切の疑問は基督の人格中に溶解せられ、其の言論行動の中に悉く説明せられあるを見、愕然として驚き、欣然として喜べり、故に予の信仰は『基督教的共產主義』にして又『共產主義的基督教』なり、是れ予は如何にして社會主義者となりし乎との質問に對して答うべき過去の徑路なり、現在の立場なり、將來の念願なり」(明治三十七年一月十日付、第九號)

こゝには天皇神權論にたいする抵抗者がその據り所をキリスト教に見出したが、キリスト教だけでは満たされなかつたものを社會主義によつてはじめて満たされた過程が示されていて、日本近代思想史の觀點からきわめて興味深いものがある。

るのであるが、同時に注目される點は、「予の信仰は基督教的共產主義にして又共產主義的基督教なり」というような形でキリスト教と社會主義とがきわめて無造作に——なんの矛盾撞着も意識されずに——結合されており、しかも依然としてキリスト教が主であつて社會主義はその信仰を深めたものとして示されていることである。したがつて彼にとつて、「武裝侵略の國家説も所有私權の法理論も賃銀奴隸の經濟制度も一に私利神聖主義より演繹せる自然の結果」(「永世の新倫理」平民新聞第一號)であるが、この私利神聖主義は「物欲の惡鬼が人心を占領して天父の愛光を遮斷する」ことに根ざすものであり、これを取除くように努めるのが社會主義の原理なのである。社會主義は墮落したキリスト教とは衝突するが、純正のキリスト教とは唇齒輔車の關係にあるのであり、利己主義を原則とする現在の社會は根本から破壊されなければならないが、そのための手段は、眞正なキリスト教思想、四海同胞主義の傳道なのである。

キリスト教と社會主義のこのような素朴な抱合は、いうまでもなく社會主義思想の未成熟によるものであり、二三年を出ないうちに木下自身が「同時に二人の主君に奉事せん」としたものだと思ふにいたるのだが、たとえ短期間にせよこのような抱合のもとに木下の目ざましい活動が可能であつ

たとこについては、たんに木下個人の問題としてだけではなく、木下をも有力な働き手の一人とした當時の社會主義運動そのものの特殊的事情と關連して考察される必要がある。

日本の初期社會主義は『平民社』の設立を機として研究・紹介の段階からはじめて運動の段階にふみだしたといわれ、それが日露戦争にあたつて自由黨左派系の人々や良心的キリスト者等をもふくめた反戰運動として展開されたものであることは、いままた戦争の危険にさらされている我々から顧みてきわめて意義深い點であるが、しかしそれが當時における社會主義の未成熟のゆえに、のちに分派對立する様々な立場を抱合していたこともしばしば指摘されるところである。

「一、自由、平等、博愛は、人生世に在る所以の三大要素也。一、吾人は人類の自由を完からしめんが爲に平民主義を奉持す、故に門閥の高下、財産の多寡、男女の差別より生ずる階級を打破し、一切の壓制束縛を除去せんことを欲す。一、吾人は人類をして平等の福利を享けしめんが爲に社會主義を主張す、故に社會をして生産、分配、交通の機關を共有せしめ、其の經營處理一に社會全體の爲にせんことを要す。一、吾人は人類をして博愛の道を盡さしめんが爲に平和主義を唱道す、故に人種の區別、政體の異同を問はず、世界を擧げて軍備を撤去し、戦争を禁絶せんことを期す。一、吾人既に多

數人類の完全なる自由、平等、博愛を以て理想とす、故に之を實現するの手段も、亦た國法の許す範圍に於て多數人類の輿論を喚起し、多數人類の一致協同を得るに在らざる可らず、夫の暴力に訴へて快を一時に取るが如きは、吾人絶對に之を否認す」(週刊『平民新聞』第一號、三六年十一月十五日付)

三十四年の『社會民主黨』の綱領を受けついだといわれるこの『平民社宣言』の中には、幸徳を助けてこの宣言の作成に携つた堺利彦が後年指摘しているように、『自由民權主義と獨逸派の社會民主主義と基督教的社會主義との混合』(『日本社會主義小史』)がおおうべくもなく示されている。ことに日本の社會主義が米國歸りのキリスト者によつて紹介移植されてきた關係上、かつまた「當時の思想界ではキリスト教が一番進歩思想だつたので。少くとも忠君愛國の支配的思想に背く最も多くの分子を含んでいた」(大杉榮『自敘傳』)という事情とあいまつて、幸徳、堺が運動の主流となつたこの時期においても、キリスト教的色彩はまだ相當に濃厚であつた。そして實踐活動を経験していない當時の段階では、このような混合はまだはつきりした立場の分化に發展せず、おそらくそれは程度の差こそあれ、各個人の内部における混合でもあつたろうと思われる。前述した木下におけるキリスト教と社會主義との素朴な抱合も實にこのような事情に支えられていた。

木下の革命思想はこの宣言の趣旨にまづたく重なりあい、この重なりあいのうゑに彼は社會主義者として行動したのであり、そこに彼の旺盛な傳道活動があり、彼の作品が生れたといえよう。

當時すでに、絶對主義との融合をかたくしたブルジョアジイは自由主義の最後の一片まで投げすてていた。ブルジョア民主革命の諸課題の遂行は新興のプロレタリア階級の手にゆだねられてしまつたが、この階級はまだ幼弱であり社會主義も未成熟であつた。反封建の急進思想家・めばえたばかりの社會主義はこのような基本的條件のもとにてあつたのであり、そのような場に『平民社』の反戰運動が展開された。木下におけるキリスト教と社會主義との素朴な抱合も、基本的にはこのような諸事情によつて支えられたのであつた。

五

前述のように、『平民社』時代の木下の思想はその宣言の趣旨にほゞ重なりあうものであつたが、たゞ國體の問題については、やゝもすれば宣言の線を越えるものがあつたようである。これについて木下は、後年次のように語つてゐる。

帝王神權論に反對する彼の「演説は勢ひ自然に『國體論』に觸れる。これがため僕は筆頭の危険人物になつたらしい。

幸徳が非常に不満であつた。或日、幸徳はワザワザ尋ねて來て、『君、社會主義の主張は、經濟組織の改革ぢやないか。國體にも政體にも關係は無い。社會主義が世間から誤解される。非常に迷惑だ。』かういつて僕を面責した」『神・人間・自由』昭和九年）

右は木下自身が書いてゐるものだが、週間『平民新聞』第十二號（三十七年一月三十一日付）の『讀者と記者』欄には次のような記事がある。

「木下先生は、帝國の破壊は自分等の目的であると公言せられます、秋水先生は社會主義は我國體と矛盾せぬと云はれます、お二人の社會主義には違ふ所がありますか（九生）」

「木下君が、そんなことを言つたか知りませぬが、夫は多分今の所謂國家の境域を撤し世界の一致聯合を希ふの意味でしょう、予も之に異存ありません、併し直ちに今の君主を廢すべしとは申しません、立君制度の下でも社會主義は行はれます（秋水答）」

木下も文章の中では天皇にふれてゐるものは少いのであるが、小説『火の柱』の中の「世界の最も氣の毒なるもの恐くは露西亜皇帝ならん、彼は囚人なり、只だ錦衣玉食するに過ぎず」とか「獨逸皇帝、彼は憐むべき一個の驕慢兒なるのみ」とかいう表現は、同時に日本皇帝を諷したものと見られ

るものであり、また『良人の自由』では、その主人公をして帝國大學卒業のさい「恩賜の時計を拜受する」ことを避けるため、天皇親臨の卒業式から逃れさせている。彼の天皇制にたいする理解は、かつての「帝王は歴史的記念で現在に於ては無權無能の偶像だ」との考えをあまり出ていなかつたかもしれないが、この偶像にたいする反感と侮蔑、この偶像を權威あるかのごとく仕立てあげる天皇神權主義・忠君愛國イデオロギーにたいする攻撃は、當時の社會主義者中でもとくに苛烈だつたと思われる。問題が問題であつただけに文章の場合は慎重を期しており、『平民新聞』第三號の『國民思想の進路の障礙』などでも、天皇神權主義にふれながら、學者や國民が『君主』論の前に恐怖逡巡するのは思想開發上の至大障礙ならずやと結んでいるにすぎないが、彼の得意とした演説や座談では相當にはげしいものがあつたのではなからうか。彼の演説を聞いてはじめてデモクラシーの思想にめざめたという河上肇博士は次のように記している。

「私は氏の口から、今まで嘗て聞いたこともないやうな熱烈な調子の演説を聞いた。私が今でも尙ほはつきりと記憶して居るのは、その天皇神權論に對する攻撃の露骨さであつた。山口の片田舎で育つた私は（中略）こんな演説を聞かされて驚いた。（中略）山口などであつたならば、辯士は袋叩き

にされただらうにと思はれたからである」（河上肇『思い出』）また、忠君愛國思想の前に屈服し、戦争を支持する既成キリスト教にたいする攻撃が熾烈をきわめたことは、純正のキリスト教と社會主義とは唇齒輔車の關係にあるとする彼としては當然すぎるくらい當然であつた。『火の柱』の中では「王と貴族と富豪との傲慢と罪惡とに媚びて縷の如き生命を維持で」いる教會を戲畫化し、また『戦争の影』（週刊『平民新聞』十六號）においては「耶穌の説教中より主戰論に利益ある文句を捉へんとして汲々」とし、征露演説會等に狂奔する耶蘇教新教派に痛烈な攻撃を加えている。

なお彼の戀愛論は、北村透谷の流れをくむこのローマン主義者の思想が社會主義によつていかに深められたかを最もよく現わしている。『戀愛と教育』（『平民新聞』第二十四號）では、「吾人が戀愛の神聖を信ずるは是に依つて吾人が始めて『半人』の不具を脱して『全人』の完成を實にすることを得るが爲めなり、故に吾人は又た戀愛の自由を尊重せざるべからず、看よ、戀愛の秘義を蹂躪せる非自然の社會制度より胚胎する罪惡の如何に恐るべきかを、國家の維持の爲に、財産の繼承の爲に、階級の制度の爲に、而して富の分配の不公平の爲に蹂躪せられたる戀愛の自由の殘骸は、餘りに世人の耳目に慣熟して、今は既に其の悲惨てふ感覺をさへ麻痺するに至

れり、只だ多情多恨の詩人あり、詩歌に小説に之を謳ふて、其黨醒を促さんと欲するあるのみ」「戀愛は人生をして縦に永世と無限ならしめ、横に社會と團體ならしむ」「戀愛を外にして宗教を説き道德を説き、社會の改革を説き、世界の平和を説くものもあるも、吾人は之を評して龍を畫きて其の睛を點ぜざるの類と言はんとす」「乞ふ、舊慣古俗を破壊せよ、戀愛を語るを恥づる大謬見を拋棄せよ」「來れ、吾人は地に天國を築かんが爲めに戀愛の教育を行はんと説いている。

『有夫姦』『有婦姦』をえがき、これ「明治社會の懺悔也」(『平民新聞』第五十六號に見える『良人の自白』の廣告文)とされる『良人の自白』は、このような戀愛思想の持主を封建的家族制にしばられた日本社會の様々な場面に置くことによつてこの社會の形象化に成功しているのであつて、こゝに小説家木下を理解する最も重要な一環があると思われるが、これについては、また、明治のローマン主義思想の流れにおける木下の位置については、稿をあらためたい。

六

日露戰爭の終つてまもない三十八年十月、かねてからの相繼ぐ政府の彈壓とそれに結果する財政難のため『平民社』はついに解散する。それについては、キリスト教系の人々と唯物

論者との間に不折合もあつたといわれ、解散後キリスト教系の木下・石川三四郎・安部磯雄等は『新紀元』を發行し、西川光二郎・山口孤劍(彼等の入獄中は、堺・森近)等は『光』を發行して對立の形勢がかもし出された。それは、キリスト教系の人々と趣味においてソリがあわなかつた結果であるとか(『荒畑寒村』『日本社會主義運動史』)、『新紀元』はキリスト教徒に社會主義を説くために生まれたのであり、精神的方面から社會主義を説こうとしたもので、けつして物質的社會主義と對抗しようとしたものでなかつたとか(安部磯雄『新紀元の廢刊について』)言われているが、兩誌の間には次第に階級闘争、とくに暴力革命の問題が論議の對象になつていつたのであつて、反戦という共通の課題が失われたこの段階において、この問題が論議の對象となるにいたつては、もはやかつてのようなキリスト教と社會主義の素朴な抱合はその條件が失なわれるのである。そして木下においても、キリスト教と社會主義とは必然に急速な別離の道をたどらざるをえなかつた。木下の小説『墓場』(四十年)に、これを象徴するようない節がある。

「出獄後の秋山(この小説において幸徳と思われる人物。筆者註)は最早入獄前の社會主義者では無い。彼は此の半歳の閑散な自由な境界に於て、愈々其の思想を遺憾なく徹底させること

が出来た。僕が社會黨の候補を名乗つて、傳來の普通選舉を旗章にして、東京の眞中で補缺選舉競争の喜劇を演じて居た時、鐵窓の冷たき枕の上に、秋山の心は既に遠い先きまで進んで居たのだ。秋山の思想の徹底は實に壯麗の感を僕に與へた。其れと同時に彼と僕との關係に就いて、僕は眞に言ふべからざる寂寞を覺えた。彼は強固な無神論者で、僕は耶蘇教徒だ。此の五六年一つ「社會主義者」として共同の運動を續けて來たが、然かし將來は如何だろう。此の將來と云ふことを思つた時に、現在の二人の關係を考えずに居られなかつた。僕は首を垂れて暫ばし思案に耽つたが、是れは丁度「背中はせに手を握つて居るのじや無いか」と、不圖思つた。外見には非常に密接して立つて居るようだが、若し二人が足を揚げて愈々踏み出すと云ふ時には、此の手は忽ち放して仕舞はなければならぬ。——明日の別れ（幸徳は三十八年十一月四日渡米した。筆者註）が遂に永久の別れのような氣がして仕方がなくなつた。」

これは小説として書かれてはいるが、おそらく木下の實感であつたと思われる。幸徳を通じて社會主義に参加した彼にとつて、幸徳は社會主義の權化のような存在であり、幸徳との別離は社會主義そのものとの別離を豫感させたのでなかつ

たろうか。木下にとつて、幸徳がつかんだ無政府主義の思想は唯物的社會主義の發展と理解され、暴力革命は無政府主義的直接行動として理解されたものではなかつたろうか。普通選舉は木下の「傳來の旗章」であり、雑誌『新紀元』も「萬國平和主義」とともにこれをかかげていたが、當時すでに彼も普通選舉——議會主義——にたいしては懷疑になつていたらしい。幸徳を無政府主義へと追いやつた焦燥は、また木下のものでもあつた。議會主義に希望を失つたとき、彼もまた暴力革命か否かの問題に對決しなければならなかつた。『新紀元』第一號では次のように書いている。

「物欲を以て物欲を倒し血を以て血を洗ひたる復讐（人は之を革命と云ふ）は吾人之を古今の史上に於て幾度も實驗せり、然れ共吾人の所謂革命は此類のものと異りて、物欲の覇者を倒して、至愛なる神の王國を建設せんと欲するに在り、若し我黨革命の宣言を聽かんことを欲するものある歟、去らば新約聖書を播きて看よ」（『新紀元』第一號、『日本國民の使命』、三十八年十一月）

右のように書いた當時、彼はすでにキリスト教と社會主義との兩立しがたいことを意識しながら、しかもまだこの兩者を「一束して強て諧調の音を」出そうと苦しんでいたように思われる。三十九年一月から六月まで毎日新聞に連載した

『新曙光』（「良人の自白」續篇）では、主人公白井俊三をシカゴで開かれた社會主義者・無政府主義者らの國際的集會に出席させ（時期は日露戦争直前となっている、筆者註）、「列國皆な等しく好戰國民たる事を論破し、此の戦争好きでふ世界共通の惡現象には、必ず共通の原因あることを説きて物質的精神的兩方面に交渉せる現代文明の病弊を略論し、是れが根本的治療を切望する點に於て、世界の人類は皆な革命黨たるべきことを論斷」させると同時に、同席したロシア革命黨員に向つて、「吾人は地上一切の權威を否認する點に於て全然露西亞の親友に同意を表することを憚らない、去れど吾人が偽れる地上一切の權威を否認するのは、實に天上唯一の權威を愛慕するが爲では無いか、——吾人は露西亞に於ける友人兄弟等が、露西亞の偽れる權威に向て猛烈なる復讐心を抱くことに極めて深厚なる同情を有するものである。……去れど事情と經路の如何様にあろうとも、罪惡は到底罪惡である、吾人は露西亞の兄弟の悲憤を慰めるの術を知らない、去れど尙ほ飽くまでも更に一層の勇氣を振て忍ぶべからざるの侮辱を忍び給ふことを祈る」と述べて、「敗戦を通じて内亂へ」の政策を批判させているのである。まもなく日露開戦とともに、この暴力否定の主人公はロシア革命黨員にさそわれてロシアへわたり、ロシア官憲のピストルに倒れる。そして彼の死屍

をかき抱いたロシア革命黨員にいわせている、「白井君、拙者は君に反對して常に神無しと冷笑した、去れど若し神ありとするならば、拙者は今ま其れを見ることが出來た。君の高貴な精神が必ず其れに相違無い、君は拙者等の計畫に反對して、平和の目的は飽くまでも忍んで平和の道に依らねばならぬと主張した、然るに憎むべき我が露國の權力は、拙者を射らずして却て君を撃つた、（中略）赦して呉れ給へ、白井君、地に落ちた君の血しほの一滴たりとも、誓つて決して空にはしない。」

この小説の執筆も終に近づいた三十九年五月、彼は彼にとつて「地上唯一の權威であつた」母を失なつた。そしてこれを機として、急速に社會主義から遠ざかつてゐる。この小説が單行本となつた同年七月十日付の序文には次のように書かれてゐる。「一、母の死は予に取つて一の革命なり、予は回顧して最早や偽善修飾の歴史を繼續するの痛苦に堪ゆること能はざる也、予は過去の生活より全然脱却せざるべからず、是れが爲めに、予は神と人との前に一切の罪惡を懺悔せざるべからず、今や此念燃えて自ら制すべからざるを覺ゆ、即ち今夏北海道遊説の計畫を俄に中止して、蟄居靜に一篇の「懺悔錄」を起草すべく決心せり。一、予め舊友諸君に告ぐ、若し「懺悔錄」の爲めに諸君の情誼を失ふことあるも、眞に己

むを得ざる也、赤條々の「我」を回復して、社會の墳墓に入らんことは、予の寧ろ無上の天恩として深く感謝する所也。」そしてその秋には次のように述べるところまで追いつめられている。

「僕は暴力的革命に向つて眞に多大の興味を感得す。然れども僕は基督教徒也。(中略) 暴力的革命は目を以て目を償ひ、齒を以て齒に償ふと云へる舊約主義にして基督の鮮血は此の復讐主義を超脱して、天の父の完きが如く爾等も全かるべしてふ同胞至愛の福音の爲めに流されたり、僕が社會主義を信じたるも亦必竟地上に建つべき天國眞理の反影を其の經濟論に認めたれば也」(『新紀元』十二號)

このような革命理論上の煩悶とともに、「『四十までには革命を成就するよ』と云ふのが僕の口癖であつた」とその小説の主人公に語らせている三十八歳のこの小ブルジョア急進主義者は、うちつづく彈壓に伴う敗北感と、目ざめない大衆にたいする絶望感におそわれていたようである。小説「墓場」の中に、戦争直後在米日本人の新聞社から招聘の手紙を受けた主人公が次のように考へる一節がある。

「日本に生れたから日本で働く積りだが、目前の日本は駄目だ。此の傲慢の酒に酔つて居る日本國民の耳に所詮我々の言葉は入らない。彼等の前に説法するのは、犬に眞珠を投げ

て遣るよりも愚なことだ。が、彼等の酔は何時までも醒めずには居らぬ。彼等は今まに苦が浪の渦巻き來ることは知らないで、只だ戦勝の榮華を夢見て居る。榮華の代りに黒き津波の押寄せて來た時で無ければ、此の無智な傲慢な國民の迷信は醒めない。」

またこのような大衆にたいする絶望感とともに、一面では「白き手の遊民」としての階級的劣等感が胚胎していたことも注目される。「幡山君!——幡山^{はたやま}と云ふ名を思ふと共に、背の高い、色の黒い、鋼鐵のような體に粗末な洋服を着た中年の戰士の、^{うちまご}蟒^{まこと}ように熟と睨んだ剛健な姿が見える。其の容貌を一見したものは誰でも、其の辛酸の經歷と堅固の精神とを、其の額に讀むことが出来る。幡山君は學者である。然れども彼は文筆の人では無くして實行の人である。他日若し日本に於ける労働運動の歴史を編纂する人があるならば、幡山の名をば、其第一期に於ける最有力な指導者として特筆大書するに相違ない。(中略) 當夜(三十六年十月八日、社會主義協會が非戰論を發表した演說會。筆者註)の演說は(中略)彼が經濟上から戦争の害惡を諄々と説いて來た所には、彼の演說の短所が現はれた。聴衆中の反對者は其の隙に付け入つて妨害を始めた。(中略) 幡山は兩のポケットに手を挿んで、眞直に突つたつたまま、瞬きもせず睨みつけて居たが、やがて其の毯

栗頭を二三度ぶるぶると動かしたかと思ふと、大きな拳固を突出して叫んだ。

『諸君！手を出せ！』

其の恐ろしい聲と、奇妙な態度に反対者の騒ぎが急に静かになった。すると幡山は威猛だかになつて『労働者は皆な熱心な非戦主義である。戦争を好む者は皆な手の白い遊民である。諸君！手を出せ！』

斯く叫びながら、幡山は其の兩つの拳固を矛の如くに突つけた、其の拳固には、多年の労働の辛き歴史が、節くれ立つて鮮かに見える。――反対者はパタリと口を塞いで仕舞つた。(中略) 同志の拍手喝采が萬雷の一時に落ちたように、會場を動かして震ひ起つた。(中略)

僕は此の同志の、此の先輩の大成功を喜ぶと共に、我が心中に無限の恐怖を感じた。幡山が兩の拳固を振つて反対者を壓服した時、僕も亦た實に其の戦慄した一人である。『手を出せ』と云ふ幡山の命令に接した時、僕は覺えず我が手先を兩の股の下に隠くした。其の瞬間に僕は『社會主義を主張する資格が無い』と云ふ心の叫びを聞いた。――僕も實に白い手の遊民である。』(『墓場』)

さて同志たちとの約束を破つて北海道遊説をやめた彼は、東京を離れて「懺悔」に専念するのであるが、やがてその秋

には「自己の性格は到底政治運動に當るに適せずと」して日本社會黨(同年二月成立)から離脱した。『光』『新紀元』等が大同團結して日刊『平民新聞』が創刊される直前の『新紀元』最終號(三十九年十一月付)には、木下の「懺謝の辭」がかかげられている。

「『新紀元』一年の命脈は何を教へしや。

『新紀元』は兩頭の蛇なりき、彼は基督教なるものと社會主義なるものとを二個對等の異物と理解し、此の兩個を一束して強て諧調の音を出ださんと欲したりき。

『新紀元』の胃囊に於て基督教と社會主義とは何れも消化せられざりき、『新紀元』は一個の偽善者なりき、彼は同時に二人の主君に奉事せんことを欲したる二心の佞臣なりき、彼は同時に二人の情夫を操縦せんことを企てたる多淫の娼婦なりき。

『新紀元』は基督の福音に依據すべきことを揚言したりき、然れども、彼は實際に於て、基督教と社會主義とを並べ立てて二つながら踏み行かんと煩惱せり、基督教と社會主義とは元と是れ車の兩輪の類に非ず、要するに社會主義は律法的にして、基督の福音は非律法的、否な超律法的なり、故に玉乘藝人が多く、白球を乗り廻すが如くに、社會主義に並べて福音を弄ばんと欲したる『新紀元』の漬罪、豈に輕少な

らんや。故に理性の徹底を求め、良心の喜悅に従はんと欲するものは、宜しく速に此僞喜の一團を解きて、神と人との前に積日の罪を謝せざるべからず、『新紀元』の解散は是れ予等が受くべき當然の刑罰也。故に既に日本社會黨の舊友に告別したる予は、また同一の理由を以て『新紀元』の同人に告別せざるべからず。謹で天父と同胞との眼前に、満身の慚汗に塗れつつ、自ら「新紀元社」を埋葬す。

嗚呼うるはしきかな天國の門

開かれて目に近し

踏み行く道など

斯くも狭く陰はしきや。

これよりさきこの年の六月堺利彦は、石川の『階級戦争論』（『新紀元』七號）に答えた『階級戦争論に就て』（『光』十四號）の中で、「かならずしも階級闘争を排斥するわけではないが、労働者の利慾を排發し殊更ら階級憎惡の念を助長することを恐れる」という石川にたいして、次のように言つてゐる。

「石川君は又『階級憎惡の念』を甚だしく忌むべきものとして居るが、惡制度を憎み、惡組織を憎むのが、何故に爾く忌むべきであるか。（中略）労働者が敵の階級（即ち組織）を憎んで之を亡さんとする時、敵は亦た自ら衛らんが爲に労働者

を攻撃驅逐する。此に於て労働者は其の憎惡する階級の維持者、防衛者、擁護者に對し、亦た憎惡の念を抱くは實に自然の事である。

「石川君にして若し此の自然の結果を忌み、斷じて此の種の事を見ざらんと欲せば、今日直ちに去つて一步たりとも足を政治界に踏み入れぬが善い。而して獨り靜かに或一小天地に隠れ、説教なり、講演なり、著述なり、慈善なり、組合事業なり、改良事業なり、自己の意の適するに従つて其力を盡すが善い。是れ亦た固より一個の貴き生涯である。さすれば君が靜かに其貴き生涯を送る間に、世は革命の大動亂を経て、階級戦争の終を告げ、慈に新社會の曙光を見るを得るであらう。若し然らずして、石川君にして常に足を政治界に入れ、階級戦争を是認し、階級戦争を宣傳しながら、猶ほ且つ「階級憎惡の念」を滅せんと勉むるならば、是れ明かなる矛盾撞着であつて、其結果は只だ社會進化の趨勢を阻止する丈の事であらう」（『堺利彦全集』第三卷）

これは直接には石川にむけられたものであつたが、この「直ちに政治界を去つて靜かに小天地に隠れよ」との忠告（？）に、木下はまつたく文字どおり従つてしまつたかの觀がある。その後木下尙江の名は政治運動にも社會運動にも再び現われていない。注目されることは、社會主義と離れてから、

まもなくキリスト教とも離れていることである。木下におけるキリスト教と社會主義との抱合は、きわめて無造作で素朴なものではあつたが、そこには、彼がひとたび社會主義者でなくなつたとき、キリスト者としてもありえなかつたほど必然的なものがあつたのではなからうか。彼は後年次のように回想している。

「明治卅七八年の日露戦争が幕を下ろした時、我等『非戰論者』の陣營にも一大動揺が起つた。(中略)幸徳が社會民主主義の舊衣を脱して、無政府主義の新衣を着けたのもこの時だ。『革命欲』——『權力欲』が、あたかも氷山の倒れる如くに、僕の中に碎けた。同時に自然神學派の「神」の幻影が、雲煙のやうに散つてしまつた。荒野の迷兒の如くに取り残されたものは、幼童時代の元のまゝなる一個の「厭世漢」。生得の厭世欲に導かれて、僕は四十にして始めて佛教といふも

のを搜して見ようといふ氣になつた」(『神・人間・自由』) 　　こうして彼は佛教に道を求め、また岡田式靜座法に専念した。『火の柱』(三十七年刊。發禁)、『良人の自白』(上篇三十七年刊、中・下篇三十八年刊、續篇三十九年刊發禁)以後の著作には、『懺悔』(三十九年。發禁)、『飢渴』(四十年。發禁)、小説『靈か肉か』(四十年。發禁)、小説『墓場』(四十一年。發禁)、小説『乞食』(四十一年。發禁)、『荒野』(四十二年。發禁)、小説『勞働』(四十二年。發禁)、小説『火宅』(四十三年、『日蓮論』(四十三年)、『法然と親鸞』(四十四年)、『野人語』(四十四年)、『創造』(四十五年。發禁)、『神・人間・自由』(昭和九年)等があり、『田中正造翁之生涯』を編纂している。東洋人的な隱者生活をおくつて、一九三七(昭和十二年)病死した。